

で、稲の水を落して二三日後、足跡が残らない程度の乾きが適當である。種子が数日間も水漬りでは腐る。多湿の場合は一〇株ごとに溝を切つて排水をはかる必要がある。

中播では生育後「むら」にならないよう丁寧に播くこと、そのためには種子を最初から混ぜないで別々に播くこと、あらかじめ種子量を株別に割当てて目算を立てるなどの注意がある。このように適切に中播きを行えば収量は多くなるもので、たとえばレンゲとイタリアンの混播の場合、四月頃で約四、〇〇〇キ、五月頃再生量二、〇〇〇キ程度が得られる。慣行のレンゲ栽培では低収地が多いので、この方法による多収種技術は今後普及効果をあげるものと期待される。

れる。

8 冬飼料は必ず根菜を入れること

飼料カブは九月上旬までに播種した場合に驚くほどの成育をする。下総カブが最良で冬期一二月末頃まで置く時は一〇アまで八〇〇〇キの多収を得ることが出来る。スエーデンカブは有利ではない。三区の早期稲跡には下総かぶ桜島大根が適當である。地域によつては甘藍を定植する。いずれも冬期の多汁質飼料は泌乳用飼料として最も適當で暖地の必需飼料作物である。地中でそのまま放置する時は相当長く貯蔵することが出来る。跡地には三月になると青刈デントを播種することが出来る。霜にあと芽が枯れるので下旬頃が安全である。

カナダ農業実習記



保田光弘

私が第二次の農業実習生として昭和三十三年三月カナダ国のケベック州に派遣されて満一カ年間現地を得た乏しい体験記を述べて読者諸賢の今後の話題になり得るならば幸いと考えている次第です。

私 何度かの審査にもどうやらパスして約二週間の船旅を続けて異国の土を踏み、大陸を三日間も汽車旅行をして入つた実習農家はカナダでも東の方、北緯四六度、西経七七度くらいの地点ジャウヴェルという町に

早春の青刈デントは発育が非常に早く成育期間六〇日で約三、五〇〇キ、二度播き二回刈りで七月中下旬までの水稲晩化をするならば七、〇〇〇キの青刈収量が得られる。

9 その他の暖地技術

大きい問題であるが、これらの技術の研究がされなければならぬものに堆厩肥を増投することが大切である。今までの試験場研究では有機質施用が少く、せいぜい一〇ア当り二、〇〇〇キ程度である。ところが青刈作物では増投するほど増収の傾向が見られる。とくに畑のような瘠地では、とくにこのような事実が現われる。暖地用作物の青刈デントコーン、デオシント、ソルゴ

ある一酪農家でありました。カナダでの酪農地帯といわれるオンタリオ州とケベック州の州境オッタワ河の流域でした。最初に目に映つたのは広い農地の中に点々としかない農家の建物であり荒地もかなりあるということ、そして到る所に木立が残されているのを見て森林の豊富な国と聞いていたがなるほどと思つたものでした。

牛の種類も多くいるが人種も多い。とにかくこれらが混つてカナダ国の社会を構成しているのも面白いものでした。樹種をみると樺、楓、白樺に混つて松があるというのは野幌の原始林をみる感じがした。

こうした周囲に青粘土の多い耕地約三〇〇と永年放牧地、砂地、森林三〇〇の合計

一、エンバク、イタリアン等は今後酪農家として厩肥の多投を心掛けてもらいたい。このような肥沃地の場合には青刈デントよりもデオシントの方が二〜三回刈によつて収量も優る作物となる期待が持たれる。

甘藷の直播栽培はイモ莖葉量合わせて二万キに及び反収の試験成績をあげているので、今後の畑作栽培には最大の魅力を持つものとなる。また果樹園の草生改良としてラデノクロロバのバラ播き、原野、畦畔のラデノクロロバのタコツボ移植はラデノクロロバの暖地に立派に普及できる実証をしめしているので今後青刈作物をしのぐ成績を上げるだろう。

六〇畝を所有して農業を営むエアージャのブリーダーであるアールサ・タッグ氏の農場が私の実習農家でした。

家畜は馬二頭、種牡牛二頭、成牛二〇頭、若牛一五頭、犢一四頭という構成、家族は夫婦と娘二人、それに前年の九月から働いているというオーストリア人の雇人に私が加わつて六人になつたが労力は主人と私達とで三人になつたが、多少余り気味であつたけれどもオーストリア人は八月早々に引上げて行つたので、四カ月間だけであつたけれど四月二日に私が入場した当時すでに雪のなかつたのにも拘わらず土質の故か土地が湿つており、農場作業に掛つたのは四月下旬であつた。耕起は秋に済んでいたので堆肥散布から始まり整地、播種との順で

エン麦は五月十日デントコーンは六月四日に行つた。

化学肥料はデントコーン、エン麦にと永年放牧地の一部に施したのみ、複合肥料単味のもの等含めて七・二畝に合計三・五トを用いた。牧草地「探草用」には堆肥のみ一〇畝当り二・二ト施用した。堆肥場は近辺を歩いても全くなく私達日本流に考えようと不思議でもあつたが畑の所々に積んでいた。堆肥はエン麦デントコーン畑にも用いたが大体一〇畝当り二・二トくらいである。化学肥料は土地を悪くするから余り用いないといつていたが統計的には年々増加している。カナダ全国で一九五六年度において六六・七万トであつたものが一九五七年度において七九・一万トとなつているので明らかである。けれども私のいた近辺はあまり多く用いない、むしろ堆肥重点主義であつたのは現在の北海道の情勢と対照的である。しかし堆肥場を持つていないが故に尿を利用しないから片手落ちのやり方であつて、こうした点も改善するならば生産量の増大は容易であろうと考へて進言したが採り入れられなかつた。指導機関が奨励しないからか、残り少なくなつた自身の経営年数の故に借金をしたくないからかは私には不明であつた。なぜか、それは彼等は一代限りのもので子供が親の職業である農業を継ぐ意志があればその農場を譲るが（無償ではない）そうでなければ売却してしまつてその代金で老後を過すのであるから五六歳になつた主人してみれば進んでさういつた苦勞をしないと赤字にならない程度

の現在の在り方が無難であつたのだろう。彼等の考え方について述べる事が以上の点を明瞭にすると思うので記してみた。

農業経営と生活に対する考え方として、一定の生活レベルを維持しつつ楽しい毎日を過すに必要な経費を得るだけの収入があるように乳牛を中心にした経営を行つていくということである。すなわちそれに必要な設備と土地、乳牛頭数を揃へるために最初は政府あるいは銀行から借金をするわけだが、これを返済するために若くは良く働くが、こうして返済が終わると悠々としてやつているわけだが人によつて短期間に終るものと長期に亘るものとあることはいずれの国においても同じであらう。そして先にも述べたごとく自分一代で終りのものであつてみれば、老いて再び借金をして苦しみたくはないのが人間であらうと思う。

私がいいた農場の建物にしるその他の農機具にしる総てが二十年近くも経過していたことは、当時にすれば他に優れたものであつたのであらうが現在では時代遅れのものになつていた。だが家庭内の設備だけは、ほとんど新しいものを取り入れていたのは生活を楽しむための一つの現われだと思つた。

私がいいた間にも古い薪ストーブでお湯を作れるものであつたのを、新しく電気で自動式に常時お湯が作れるようなものに取替へたりした。家庭内ではすでに電気冷蔵庫、電気ストーブ、アイロン、シン、フライパン、ミキサー等の電気器具からボン

プ、テレビジョン、電話と電化されていたし、畜舎にはボンプ湯沸し、グラインダー用のモーター、ミルカー等かなり古い施設として使用されていたが、牛の体毛を刈るバリカンも電気用のもの、とにかく電気は豊富に使用される。

冬期間の電気使用として自動車トラクターのエンジンを温めるのも電気であつたがこれだけ使用していても料金が廉価なのに驚いた。電気料金は隔月払いだが一二月分を見ると年間で最も多く使用する期間だけに二、六六〇キワで使用で二、五が何しが九、〇〇〇円台であつたが、他の物価に比較して非常に廉価である。年間の料金が一九七がで七万九〇〇円年間粗収入の一・四％である。播種期から生活の方へと横道をしてしまつたが話を戻しましょう。

エン麦にはチモンシー五、ルーサン六、赤クロバー四、アルサイク・クロバー一の割合で一〇畝当り四畝（一・八キ）の混播をした。

これは乾草を目的としたもので三カ年くらい使用して転換していた。輪作形式は整然とはしていない模様だつたがエン麦（牧草混播）牧草——牧草——デントコーンの五年式が多いということであつた。

また永年放牧地には一〇畝当り三畝（一・三五キ）の播種量で苜蓿ではレッド、アルサイク、ラデノー、ルーサン、禾本科でオーチャード、チモシー、ブROOM、ケンタッキーブルー、メドウフェスク、リードカナリーといつた一二種類を混播したといつ

ていた。デントコーンは畦幅〇・九畝、株間〇・三畝で播種した。普通大豆混播を行つたが人によつて向日葵を行つている人もいたが牛の嗜好性がなくて駄目だとは大豆を混播する人の話であつた。単播の人が少かつたのは牧草の中でもルーサン等を主眼としていた点と併せて考へて蛋白の問題を重視している故でしょう。

農機具にしても設備にしても私とともに行つた他の二人はオンタリオ州にいたわけだが、この人達の話を聞くと私のいた近辺より一歩進んだ農具と設備をしていたというのを考えると、ケベック州の農業は遅れているのではないかと推察される。既して貧乏なかも知れない、でも日本の農家に比較すれば豊かというか生活水準は高いと思つた。私の考え違いであれば幸いであるが、生活様式の異なるところから家庭内の設備もおのずから變つて来るのは当然だといへばいいないこともない。

帰國してみて改善したいと考へたことの第一は彼等の規則正しい規率的な働き方と時間を守るとい習慣であつた。こういつた習慣も長い年月を経て形成されたものであるが、とにかく、これらが経営と生活に結びついている点は今後の経営改善の根本とすべきものだと思へている。

まだ書きたいことは山積しているが次回に発表することにしてお許しを戴きます。

（未完）

（一九五九年七月下旬）